
WALL

小空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W A L L

【Nコード】

N 3 9 9 5 D

【作者名】

小空

【あらすじ】

目覚めると、左手は冷たい壁に呑み込まれていた。少し手を伸ばせば、彼の手の微かな温もり。壁に開いた小さな穴からの恋人の存在だけを希望にする二人に、非道な条件が課せられる・・・

プロローグ：きのう見た夢の話（前書き）

特に何も書かれていない場合は主人公兼ヒロインの視点からの物語、視点が変わるときは前書きに何視点なのか書く様に致します。

プロローグ：きのう見た夢の話

いらっしやい、お嬢さん。

今夜はよく冷えるね。

ところで、君は本当の悪夢を知っているかい？

ああ、知りたくてここへ来たのか。

見せてあげようか？

僕？

僕は、ただのしがない道化師さ。

欲しいものもろくに手に入れることの出来ない、非力な道化師さ。
おっと、そんな悲しい顔をしないで。

僕のために君が泣くことは無い。

だって、君はこうしてここに来てくれたじゃないか。

でも、それももう遅いんだ。

もう、僕は僕じゃなくなってしまったんだ。

何も、怖がることは無い。

こちらへおいで。

そして、また、少し眠るといい。

そのころには、準備が整っているはずだよ。

君の見たがっていた、

ああ、もう寝ちゃったのか。

おやすみ、お嬢さん。

1..目覚め

こちら側に、わたし
向こう側に、あなた

目が覚めれば、冷たいコンクリートの壁によりかかっていた。
涙が一筋、頬を伝っていた。

何か、とても悲しい夢を見たような気がする。

薄っすらと目を開けてみると薄暗い部屋に、鉄格子の窓から伸びる
光の筋が3本。

見回すと、そこは映画なんかでしか見たことのない、そう、丁度牢
獄のような場所。

頭の中では、夢じゃないかと考えながらも、背中から伝わる冷たさ
に嫌な汗が流れる。

じわりじわりと恐怖が滲む。

「私の、部屋じゃ・・・ない」

腰を上げようとした私は何かに動きを阻止された。

左腕が・・・ない。

いや、正確にはコンクリートの壁に開いた直径10センチほどの穴
に私の左腕は突っ込まれていた。

どれだけ引っ張っても抜けない。

手首が何かに固定されている。

冷たい、金属に巻かれているような感覚。

穴に突っ込まれている左の手首は、穴の中で手錠で固定されている
のだ。

それも、電気椅子なんかについている様な太い金属の輪で。

これじゃ、本当の囚人みたいじゃない！

現実ではありえない風景に、混乱する。

でも、肌に感じる寒気や、流れる汗や、手首の金属の触れる感覚は確かなもののように思う。

怖いから大声を出すことも、穴を覗き込むこともできない。ただ呆然とコンクリートに背中を預けて、辺りを見回した。

震える唇をこじ開けて、静寂に溶け込ますような、消えるような小さな声で呟いた。

「ここは、どこ?」

2..壁の向こう側

少しの間、何も出来なかった。

自由な右手で膝を抱えて、出来るだけ小さくなって壁に身体を預けていた。

不思議と涙は出ない。

人間は、こんなにも不意に予想だにしない事柄が起きると涙を流すことすら忘れるらしい。

ただ、得体の知れない恐怖、不気味さ、これから自分はどうなるの？最悪の想像だけがぐるりぐると脳内で展開されていく。

誘拐？だとしたら、何時？

私は明の部屋で、いつもと同じように・・・。

そこまで来て、私の関心は一転した。

「そうだ、明・・・！」

自分の心配をしてる場合じゃない！

私と一緒にいた、彼氏のこと頭がいっぱいになる。

私がこんなところにいるって事は、彼は無事じゃないかもしれない。何があったの？

きのうの夜、一体何があったの？

頭がぐちゃぐちゃになって、狂ってしまいそうだった。

「いや・・・！誰か、誰か・・・」

すぐるように伸ばした左手。

指をピンと張って、出来るだけ遠くに。

ふいに、何かが左の指先に触れた。

心臓が飛び出しそうだった。

さっきまで精一杯伸ばしていた指をぐっと、握る。

ドキドキドキドキドキドキ。

物音の無い部屋だけに、自分の鼓動が異常に大きく聞えた。

何？誰！？

私の左手に不気味に残る生暖かさ。

感触と温度から、動物・・・十中八九人間だろうと思った。

ただ問題は、それが私の「味方」なのか「敵」なのか、ということ。
もう一度触れてみようか、いや、危険すぎるんじゃないか。

とりあえず、落ち着こう。

そう思って、スッと息を吸い込んだ瞬間！

私の身体は再び、飛び上がった。

ギュッと握った左手を、掴むように大きな手に包み込まれた。

また、心臓が煩い音を響かせる。

その音を掻き消すように、聞き慣れた声があった。

「・・・未来^{みき}？」

私の名前が、小さな穴の隙間から飛び出すように静寂の部屋に響いた。

3..約束

私は、慌てて穴を覗き込んだ。
さっきまでの警戒心は全く無かった。

その隙間から微かに見えるのは、少しつりあがった二重の気の強そうな目。

強引で、でもとても優しい、彼・・・明の目だった。
小さな隙間から見詰め合う。

心臓の音が徐々に静かになっていく気がした。

「未来、どうしてこんなところにいるんだ！」

「それはこっちの台詞よ！明、ここはどこなの？」

「わからない・・・俺はさっき目覚めて、そしたらお前の声がして・・・」

そこで、明は黙ってしまった。

明の手が、きゅうときつく私の手を握っていた。

不安なのは、お互い様のようだった。

そう分かったとたん、一瞬消えていた不安が膨れ上がってきて、カタカタと身体が震えた。

彼の存在を確認出来たのは嬉しいけど、これから何が起こるか分からない、いや、むしろ嫌な予感ばかりする。

そんなことに、私だけでなく、明が巻き込まれているという事実。

ふいに明の手が私の握った手の指をほぐした。

指と指が絡められて、貝殻つなぎになる。

震える私の手を、優しく握る。

彼は何も言わなかった。

ただ、私の震えが止まるまでずっと手を握ってくれていた。
不器用な彼らしいと思って少し笑った。

「明・・・ありがとう」

「未来、これから出るまで泣くなよ。俺が絶対、お前を守ってやるから。泣くなよ」

ぎゅっと、握る手に力が込められた。

ぎゅっと握り返して答える。

唇を噛んで、涙を堪える。

「絶対、ふたりでここから出よう」

小さな穴の中で、お互いの小指を交差した。

「約束だよ」

私たちは、誓いの歌を一緒に歌った。

4..第一回放送

それから少しの間、お互いに手を繋いだまま恐怖心をかき消すように会話をし続けた。

この空間の話じゃなくて、日常にするような他愛も無い話。

去年のクリスマスの話だとか、あの映画を見に行きたいだとか、そんな話。

「それでねー、明・・・来年は、ね・・・」

そこまで言って、なんだか奇妙な気持ちになった。

『来年』

こんな何が起こるかわからない部屋の中で、『来年』を迎えるのだろうか。

そもそも、今の状況の私たちに未来みらいなんてあるの？

忘れよう、忘れようとしていた不安が再び浮き上がる。

自然と明の手を握る強さが増したようで、心配そうな明の目が穴の隙間から見えた。

「・・・大丈夫か？」

「・・・うん、大丈夫。来年は、ね・・・明、もつともつと幸せな年になると思うの」

涙が滲んだ。

明に気づかれないように声を抑える。

抑えてるのに、どうしてだろう。

「・・・泣くな、未来」

明は静かに言った。

どうも、彼には隠し事はできないな・・・と思って、小さく笑った。少しだけ、幸せだった。

「もう、泣かないよ・・・私、今決めたから」

空いた右手で涙を拭う。

もう、泣かない。

真っ直ぐに視線を上げた。

そこにかち合ったのは、学校なんかにあるような放送のスピーカー。全く気づかなかった。

小さく息を吞んで、明に問いかける。

「ねえ、明の方にも、放送のス・・・」

言いかけた瞬間、急にそのスピーカーから小さくクラシックのような音楽が流れた。

次第に音は大きくなる。

私は、嫌な汗が滲んだ。

明の手をキュッと一度握ると、キュッと明から返ってくる。

クラシック音楽が途切れると、ヘリウムガスを吸ったような声が部屋中に響いた。

『只今より、第一回放送を開始致します。』

初めまして、新井山 にいやま 明さん、田辺 たなべ 未来さん。

私は、このゲームの管理人を致しております、ピエロと申します。急な出来事に、疑問は多々おありでしょうが・・・貴方達はこれから私が言うルールにだけ従って下さればそれでもいいのです。

貴方達に拒否権がないことは、おわかりですね？

さあ、ルールは実に簡単、かつシンプル。

どちらかひとりの死と引き換えに、どちらかひとりがここから脱出できる。

ただ、それだけのことなのです。』

私は急な話を理解できるわけもなく、ただ、ぼんやりとスピーカーを見つめていた。

繋いだお互いの手が一気に汗ばんで、熱くなるのを感じた。

5. 明の決意（前書き）

（明視点です）

5.. 明の決意

『この放送終了後より、あなた方にブザーをお渡しします。

そのブザーは、あなた方がトイレに行きたい時等に鳴らしてください。

こちらの者が直ちにそちらへ伺いますので。

朝食、昼食、夕食はこちらから一定の時間で配膳致します。

その時に飲み水もお配り致します。

また、その時に結論――ああ、どちらがここから脱出するか、決まりましたらお申し付け下さい。

その時点でこのゲームは終了致します。

ただし、このゲームでの結論は脱出する側が「私が脱出する」と言うのではなく、取り残される側の人間が「私が死ぬ」とおっしゃって下さい。

そうでないと・・・裏切りが、生まれてしまうかもしれませんしねえ。

あなた方も、人の子・・・ここから生きて出たいという気持ちはおありでしょうか。

ああ、それと・・・ずっとここに居つかれても困りますので、ゲームの期限を、今日を1日目として7日間とします。

ですので、7日目の夕食配膳時までに結論をお出し下さい。

それと、この放送は朝10時と夜10時に行ないますので・・・くれぐれも、聞き逃すことのないように。

それでは、健闘を祈ります。』

奴のふざけた放送はこう続いた。

それから、また掠れたクラシック音楽が部屋中に響いて、やがて消えた。

その放送内容はまるで、不気味なホラー映画。

俺は、映画の哀れな主人公になったような気がして少しおかしく思った。

それでも、笑みをもらすような余裕は無かった。

未来は何も言わずに、俺の手を震えながら握っていた。

長い時間、未来と話すうちに夢ではないと、ひしと感じた空気が、また非現実的なもののように感じた。

こんなことが、あるか、何の冗談だ。

これは、長い長い夢、なあ、そうだと言ってくれ。

すぐるような気持ちで見上げたスピーカーも、今は無責任にも黙り込んでいた。

ちくしょう、ちくしょう。

ギリ・・・と齒軋りをする。

「…ねえ、明、約束…したよね、絶対、ふたりでここから出よう、って」

ふいに、穴から未来の声がした。

小さく、か細い声だった。

“約束”

その言葉を聞いた瞬間、俺の恐怖心は冷たい壁に吸い込まれるように消えていった。

何を躊躇することがある？

俺は、彼女に約束したじゃないか。

俺は、ある決心をした。
揺るぎない決心を。

（俺は、どんな手を使っても…未来をここから出す！）

そう、どんな手を使っても。

俺は、約束した。

“俺が絶対、お前を守ってやるから”

俺はそう、彼女に約束したんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3995d/>

WALL

2010年10月10日19時03分発行